

琢堂さん 照道さん (1)

—樋口琢堂・細井照道、小伝のための覚え書—

近 藤 孝 一

(ひなどり学園園長)

はじめに

京都の社会福祉界と私とのかわりが出来たのは、昭和二十六年初夏、養護施設・北山寮（現つばさ園）の児童指導員になったときからである。しかし、樋口琢堂・細井照道の両先輩には、ついにお目にかかる機会がなかった。

そのことが、かえってお二人の人物と業績について知りたいという気持ちをかきたてたように思う。大照学園の応接間で徳富蘇峰の書、吉井勇の歌、福田平八郎の絵、横山大観からの書簡等々を見るたびに、その交遊の広さに思いを馳せ、和敬学園へ行くたびに、まだ見ぬ『衆善』への

期待をふくらませていた。

花田先生・乾先生から『仏教福祉』で京都の仏教家と社会福祉の特集を組まれることを聞いたとき、私は即座に樋口・細井両氏を担当させて欲しいと願い出た。そのために和敬・大照両学園へしばしば訪れ、秋の彼岸前には四国の竜雲学園にも足を運んだ。そして以下のような小項目を掲げて、その中で両先達のことを書いてみようと思った。その項目を列記してみる。

一、京へ—伊勢と四国から

二、宗派—禅・臨済宗と浄土宗

三、社会福祉事業―同じ出発（少年保護）違った展開

（養護施設・精神薄弱児施設）

四、交友・人脈―「衆善」をめぐる人々と文人墨客

五、人柄・エピソード他

と、およそこのような組み立てでお二人を対照的に書き綴って行けたらと思った。いわば小説的手法を取り入れてみようかと思ったのである。

この気負いが、ブレーキになり、締切り日がきても文章にならず、編集部にたいへんなご迷惑をかける結果となった。お詫びすると共に、普通どおりお二人別々に小伝を綴り当面の責めを果したい。

一、樋口琢堂小伝

昭和三十二年九月二十七日、樋口琢堂さんが亡くなられ、その遺体を安置されたとき、枕の下から遺書が発見された。四百字詰原稿用紙にすればおよそ十枚、ご遺族は告別式に間に合わすべくそれを小冊子にされた。『追想―病床に於て―琢堂誌』近影一葉を入れた、ポケット版十二ページの

小冊である。

これをそのまま転記すれば、まことに要を得た『琢堂小伝』となる。しかしそれでは全くの『孫引き』、みずから伝記執筆を買ってでた意味がない。が、やはり『追想』の順に従い、これに三百有余冊に及ぶ月刊『衆善』の記事のごく一部を援用して綴って行くことにする。

『追想』は、『生者必滅会者定離、又生死事大無常迅速』という乍ら、さて愈々となりますと「今迄は人の事だと思つたにわしが死ぬとはこいつたまらぬ」と一茶はいいました。禅門では最後の一句如何と叱咤される処ですが、老拙は恥かしい剃頭の俗人で、還暦の偶成に「諸悪と衆善、幾多の葛藤、総てに不与塵影裡何をか琢かん」ことに切磋琢磨しながら終に琢き得ず化を遷すに際し、生前御法愛御恩顧を蒙りました諸彦に御挨拶します。と、書き出され、これにつづいてその生い立ちが語られている。

伊勢四日市に二倉持ちの家に生まれ、父の失敗にて親子七人離散生活の憂き目に逢い六歳の時、弟と共に叔父方に厄介になり育てられました。が、十二歳の時縁あって銀閣

寺へ参りました。——中略——父は東京方面というのみで母は再縁、兄弟五人は離れ離れで、長男は親の後仕末のため渡米して永い出稼ぎ、長女は病死、姉は他に縁づき、弟は叔父方で邪魔物扱いのため、兄の後を追うて渡米して自立に進み、出家得度の我身は矢張り可愛がって下さる師匠のみが頼りでした。”



伊勢から京都に出てきた少年琢堂は、梅芳和尚の初弟子となり、その慈愛と訓育の下に学業は般若林に学び、僧堂

は円覚寺宗海老師に参じた。そのときに肋膜炎をわずらい、暖国鹿兒島に転地、修業と保養に努めたが、一時は再起不能と思われるほど病状が悪化したこともあった。しかし旅先まで寝込んでしまつてはと氣力をふるい起こし、また良き医師にも恵まれて、回復のきざしが見えてきたおり、師匠の病氣重態の報に接し帰京した。明治四十二〜四十三年ころのことである。

それから二〜三年後の明治四十五年七月二十一日、二十七歳で慈雲院住職となり、和敬学園との関わりが生じたのである。ここでもまた『追想』から引用させていただくことにする。

“その後身体は矢張り病院に通う有様であり、禅僧としての本分は到底望み得ないこと故、せめて師匠の年（四十七歳）まで生きぬいて宗門の下僕役で過したいと念願しました。偶々当時広島県出身で、一日一善を唱導し明治神宮外苑の青年会館設立発起の先覚者山本滝之助氏と意を同じうして、道林禅師と白樂天の因縁を引いて衆善会を組織し、一日一善を世上に汎めることにし念願の一端を実行に移し



ました。

貧弱な生活の中から節約して一ヶ月記載出来る一日一善用紙を二万五千枚随所に施配しましたところ、鐘紡京都支店を始め諸所より美事記載の善行表を送られましたので、これは此儘反古にすべきではない。推賞と奨励とに勤むべきであると信じ、大正六年七月、衆善雑誌第一号一千部を発行しました。其後多い時には施本用に使われて六千部増刷したこともありましたが、財源となる広告を絶対に避

けましたのは、広告料を貰うと一頁より二頁、三頁と欲になり易いために受けなかったため、その代り後援会を組織し各方面からの同情を得て、おかげで欠損勝ちとはいいい乍ら継続することが出来ました。”

月刊『衆善』の創刊号の表紙には、大正六年六月二十五日第三種郵便物認可と、大正六年七月一日発行（毎月一回一日発行）の文字が見られる。しかし、普通創刊号の巻頭にある「創刊の辞」は見られない。その創刊のことばに当るものは、巻末近くに「如是観」と題して次のように書かれていた。

如是 観

辱くも 今上陛下 皇太子殿下にて御在します時、私は銀閣寺の小僧で十二歳の腕白盛りでありました。明治三十一年十月四日銀閣寺へ行幸被在しました折、畏くも一般拝観者の如く案内せよとの御言葉が下り、名譽の御案内を申し上げました。御休憩の時 陛下は私の頭に玉手をかけられ、

姓名年齢父母の存在等種々御下問を頂き、其上に『勉強して善き坊さんとなれよ』と御厚き御言葉を頂きました。無上の光栄を拝して居るもので、一昨年御大典の当時『善き坊さんとなれよ』と仰せられし此有難き御一言の玉音を痛切に感じ、何か社会の爲め尽したいと思つて手始めに一日一善を思い立ち、以来今日迄貧僧小遣錢をはぶき一枚刷なれ共、施与送付せし日記用紙は一万五千余枚になりました、

人心兎角浮薄の折なれ共、中に熱心に毎月必ず書いて御送り下さる御方が平均三十余名ありまして、各方面から隠れたる種々の社会公益及び自治精神の日記が参ります故、私は非常に喜んで居ります。処が近來一層同志の御方が益々多くなりましたので、私の立場としては是非実践躬行者（私の信徒です）を紹介すると共に他の方々へも此心を持って、社会人心道德の上に改過遷善の道を開かん爲め、如是観じて会を組織し月刊小雑誌を発行しました訳です。此雑誌こそ飾り氣のない誠心こめたる貧者の一灯でありまして、百の巧言よりも一善行の優る現実的指導をせんと欲します。それで之れを知るものは之れを好むものに然かず、之れを

好むものは之れを楽しむものに然かずで、善き楽しみは多くの人と共に楽しみたいと御勧めして下さい。是れまた一善であります。（樋口琢堂）

とあり、そのあとに趣旨及会則（八カ条）と、投稿歡迎の簡単な一文が添えられている。

大正六年七月創刊された『衆善』は、昭和一八年一二月の終刊号（三一七号）まで、三十年近く発行され、そのほとんど（若干散逸した号あり）が、各年ごとに琢堂氏の手により綴じられ、和敬学園に保管されている。今回、各号の目次だけにざっと目を通したが、寄稿者の範圍の広さに驚いた。順不同、思いつくままに名前をあげてみる。

本田大拙・大西良慶・菅原時保・松原泰道・小山乙若丸・釈宗演・椎尾辨匡・間宮英宗・山田荊州・竹田穎川・関精拙・伊藤敬宗・渡辺海旭・矢吹慶輝・梅原真隆等の宗教畑の人びとはもとより、

若槻礼次郎・一木喜徳郎・平沼騏一郎・高橋是清・石黒忠恵・後藤新平・東條英機・荒木貞夫・鳩山一郎・徳

富蘇峰・渋沢栄一・新渡戸稲造・三宅雪嶺・高島米峰・橋田邦彦・沢柳政太郎・紀平正美・井上哲次郎・三浦周行・辻善之助・岩村通世・和辻春樹・島津源蔵・田中緑紅・八波則吉・薄田泣菫・久留島武彦・笑福亭松鶴等々まことに多彩な執筆陣である。琢堂さんはどのようにして『衆善』の原稿を集められたのであろうか……。



編集兼発行者としての琢堂さんも、主幹あるいは琢堂の名で筆をとっている。その記事の題名を、これまた順不同にあげてみる。

聖徳太子と佛教／一善の快樂／一杯の水が五萬圓／柳原二位局様にお逢いして／一善一善又一善／一銭一個も尊き一善／思い立てばすぐ実行／入虎穴不得

虎兇／小さい事柄が斯くも将来に響く／独りを慎しむ／地藏様は矢張り正直／花の育たぬ里はなし／水の大切と下駄の揃え方／再び啐啄に就いて／正しく踏み出せ初めの一步／死蛇を弄して活竜となす／一桃腐って百桃損す等

ほとんど各号に執筆、その人柄・考え方等の一端を知ることが出来るし、大正一三年、慈雲院の庫裡の一部を改装して、少年保護施設和敬学園が誕生してからは、当然のことながら『衆善』に学園の消息記事が多くなってくる。「和敬学園の光栄」「和敬学園々舎新築に就いて懇願」「和敬学園の竣功せしに就いて感謝」「和敬学園竣工式の記」「新聞記事にありし学園の真相に就いて」「退園少年家庭の楽しい正月」「少年保護事業の体験に就いて」や写真が多数掲載されている「和敬学園要覧特集」などは、むしろ今回の本誌にその詳細を紹介すべきであるが、準備不足もあり残念ながら他日に譲らざるを得ない。

文庫版の大ききで出発した『衆善』は、昭和一五年の二

百八十三号からB6版にかわっている。その号に次のような「誌型変更の挨拶」が掲載されている。

誌型変更の挨拶

本会の発会は大正四年十一月十日、大正天皇御即位式記念日で、本誌の初号発行は大正六年六月で爾来二百八十三号、即ち二十五年を迎えることになりました。此間雑誌の型を変更せんかと思ひしこともありましたが、一事貫行一善主義で通して来ましたが、六、七号発行の時、経費の点で左り向きかけましたので、維持会を組織しましたら、芳情に深き願つても尚不如意勝という状態ですが、私心私慾を離れてやれば何とか切り抜けられる処迄進んで行こうかと念願しています。処で今回其筋より規格統制にて雑誌の型が五種類に定められましたので、本誌も止むを得ず規格により新体制格となつて変えました。字数と頁数を比してお恥かしい訳ですが、只一時的派手にして平古垂れるよりは、一善主義で目立たなくとも内容を充実し吟味してお見えすることに、特別のご愛顧を蒙りたい意志諸彦有志

から多大の御援助庇護を蒙りましたので、大いに力を得、其後引き続き今日迄多年に渉り、時々特別御配慮に預りました御慈悲によりまして、継続して参りました事は、厚く御礼を申し上げますと共に此処迄やって来しましたことを喜んでおります。

然し乍らお恥かしい話ですが、雑誌経営上最大の助けとなる広告は、本誌は絶対に致しておりませぬ。それに近來諸物価の騰貴、別して用紙の払底其他の事情で、維持金の取崩をです。何卒永年御愛顧を蒙りました本誌、此上其御慈悲を垂れ給いて、益々御指導御鞭撻を懇願致します。

それから三年後に『衆善』は三百十七号をもって終刊せざるを得なくなるのである。時局の推移を記事の見出しの一部で追つてみる。「近衛さんの一事でも見習いましょう」「戦国時代古武士の節約ぶり」「至安と危難」「戦いに勝ち抜け」「新嘉坡に凱歌挙る——一億愈々固し」「職域奉公責任を果せよ」「必勝信念を堅持せよ」「愛国百人一首」「一番おそろしい武器」「一片茶一滴水も決戦へ」等々、

そして、三十年近い『衆善』の歩みをふりかえり、断腸の思いで「終刊の挨拶」が次のように綴られたのである。

終刊に際し御挨拶

畏くも、大正天皇御即位式を御挙行遊ばされし祝典日、
大正四年十一月十日。

衆善会を設け社会教化に発足し、一日一善実行と一日一銭貯金を奨励するため、一日一善用紙を施与配布に努めました。これは今日青年団の生みの親と申してよき広島の本瀧之助さんから励まされました事は最も厚いですが、大阪中央郵便局長の山田重郎さんが其局で、鐘紡各社へは京都支店長たりし瀧川定次さんの紹介と、名古屋淑徳高等学校の吉森梅子さんの在職中は生徒に修身科の一部に課せられ、兵庫の小学校長たりし山脇傳太郎さんは自ら一日一善実行と一日二食励行の印迄造り多年励行されし日記用紙は参考として保存していますが、各小学校へ汎く宣伝指導せられ、市内では杉本精練工場、西堀燃糸工場其他あらゆる階級に宣伝奨励されました事を書きますと、長くなりま

すから略します。

この実行されし一善日記を書いて本会迄送らるる中に、相当善行美事として世上に発表延いて一層汎く教化の実を挙げんと思ひ、同六年七月一日衆善初号を千部発刊しました。三号雑誌ではないかと称されました通り八九号発刊頃若干やり切れぬ様子になりました。

折柄大阪の木村長四郎さんの温情に授かり維持会を組織しましたら、諸彦は挙つて多数入会御後援下さいましたので、捲土重来主義で発展に心掛け、多い時には会員が施本に使用されたため一万部も発刊した事もありました。諸人には一善実行を奨め乍ら、お手元拝見と自己照顧せば慚愧至極と恥入る次第で、何等か事業をと思ひ居りました処へ、大正十三年十月十七日、京都仏教護国団にて少年保護和敬学園を経営することとなり、当院の一部を提供教化の責任に当りましたが、同園理事方の寛大な御処置に預かり都合上、昭和三年一月一日より拙者個人名義に譲つて頂きましたので、衆善会の事業として努力することになり、当時定員十名でしたが、今上陛下御即位式記念に園舎を新築し、

定員三十名となりましたが、その後定員を超過して三十八名になりし事あり、動の中にも静、閑の中にも忙、厳の中にも寛という主義でなごやかな気分も思いまして、同九年園舎の増築と拡張を致し定員はそのまま参りました。

今日では定員を遙に超過して五十名を越しており、開園以来の収容を申しますと、本年九月三十日にて実人員九百三十八人、延人員十七万百五人となっています。

和敬学園が丁度二十年という一人前になりましたについて、一家に例えば衆善会は外部に向って働き、学園は手元であって活動というので夫婦とも思い、又、車の両輪、身体の手と足という感で参りました。

衆善会が生れて以来今日迄二十七年間、寺院の改装によって実費宿泊、其他の諸会合に提供、単行本として禅林佳話集、修養と日誌、一日一善等を発行せしに何れも好評を受け、この永い間特筆すべきは前記の方々は、会員の紹介御後援は勿論でございますが、東京の天地古鑑師は月々の編集上に採点式に良不可の御批評を下さいまして指導鞭撻下さいました。



ているくらいです。

東京の震災に際してトラック一台分集り福島甲子三さんに寄贈しました時、市内の藤原益子さんの温かい心根には思い出となり、今も尚節約せし分とて時々御芳情に接しており、大阪の戸田猶蔵さんのお力で会員総会を各所で開きました事あり、又始め数回は匿名で御芳志下さるので探し当てました浜寺の奥村定吉さんには今尚此御主義で温情に接

金閣寺の伊藤寛海氏は維持会を組織するや、五、六軒の篤志家へ同道して勧誘して下さいましたこの一例で御推察下さいましょう。尚その後住になられし伊藤敬宗師は、書画をよくくされましたので一方ならぬ御後援に預かり記念に二、三枚保存し

しております。法友として山田荊洲師が早く逝かれたのは、何といっても惜しい。以来師がおられたらと寂しい追想を始終起すことがあります。惜しまれる方は早く世を去ります。

昭和九年には、京都府知事より謝状を、紀元二千六百年には中央教化団体連合会長より表彰状と記念品を頂きました。表彰の事を申せば和敬学園の事業上にて、大正十五年以来毎紀元節に、畏き^{かしこ}まりより奨励金御下賜の光栄に浴し今日迄に十七枚の御沙汰書を頂きおり、尚紀元二千六百年記念式に際しては、京都府下唯一として、特別奨励金御下賜の光栄に浴し、個人としては司法大臣の表彰を二回受しを始めその他思いがけない表彰を受け榮譽を数々受けており、尚身に余る光栄としましては、去る七月一日、從七位を拝受しましたこの光栄です。以何に更生事業に努力しましても、斯くの如き光栄に浴しますことは稀であります。それを拝受しましたことは子々孫々迄遺る^{ついで}家系上偉大なもので深く感激しております。

これは其筋に御関係の方々、即ち司法省保護局、大阪少

年審判所を始め、諸彦各位の多大な御鞭撻と御指導に預りました御蔭と深謝しています。

三千年前釈尊は印度の皇子であり乍ら衆生済度を志され、教示された仏教は三千年後の今日益々盛んに布かれ、幸いその仏弟子となっておりませんが、釈尊は最後に「四十九年一字不説」と仰せられました。又梁^{りやう}の武帝は信仰篤く諸所に寺を建立されまして、達磨大師は即座に「無功德」と諭された因縁を思い出し、永い間諸彦からこの鈍馬に鞭撻激励下さいましたにも拘らず、万分の一にも尚足らぬ御報酬の出来ないことは心残りであります。

多年御愛読を蒙りました本誌も、時局に鑑み前線に於て自爆されし尊い報国を追想して慈に自爆終刊と致します。然し衆善会名義は保存して他に何か良き方法をと考えております。時期を見て又更生のあらんことを自^じ祈^ししております。

和敬学園は御承知の通り、教家の本分として相応し、然も将来ある少年の教化は頼もしい緊急な事業であることを信じ、従来幾多の面倒を見し者が、今日一人前となって活

躍し前線には相当に勇躍しておりますことを思いますと、終生の本分事として不徳を顧みずですが、益々自覚々々他、寛行円満という精神で捨身終命致します。何卒この上にもこの大切な少年保護の上には御後援の程重々御願い申し上げます。

四分の一世紀以上続けられた『衆善』は、このようにして終止符が打たれた。筆者自身が白川学園の機関紙『つくも』（月刊）を手がけて二十余年、やがて二五〇号を迎えようとしているとき、あらためて琢堂氏のエネルギーに驚嘆し、敬意を捧げる次第である。

水上勉さんの若州一滴文庫から『一滴』という機関誌が出ている。その第三号に現和敬学園長樋口月堂氏夫人・弥生さんが「一しずく」と題し、同学園が少年保護法による施設から、児童福祉法による養護施設にか変わった昭和二十四年のころのことを書いておられる。その文中から琢堂さんのお人柄が偲ばれる部分を抜き出してみる。

「やあやあ、お待たせをしました。遠い所をようお出で下された。お母様はお達者かな」と、満面に笑みを湛えて琢堂師が入って来られた。——中略——私の目に師の白足袋が鮮烈に焼きついた。穿いていられるその足袋は、爪先は言うに及ばず、あちらこちらと継ぎ当てられ、刺子され、もう幾度水を潜ったであろうか、もう何年かを師の足と共に過ごして来たことを語りかけているようだった。——

——井戸水を汲むつるべの音に、手早く着替えを済ませ、井戸端に出た。琢堂師は上半身を脱ぎ、乾布摩擦をしておられた。「お早う御座居ます」「ヤァーお早う、昨夜はよく休めたかな」「ハイ」と答えるしかなく、急いで洗顔を済ませ、残った洗面器の水を無造作に竹縁に流し捨てた。「あゝこれこれ勿体ないことをするな、庭に降りて木なり草なりにかけてあげるのじゃ、水にも木にも草にも、全ての物には与えられた命がある。命を与えられたからには、自ら果たさねばならぬ使命がある。水も自分の果たさねばならぬ使命も果たさず、下水に流され

ては可哀相だとは思わぬか」私は言葉もなかった。見る見る涙が溢れ、師のお顔も長々と出ている耳毛もかすんで見えなくなった。「ヨイヨイ、これから気をつければよい」と優しく声をかけ立ち去られた。私の四月一日の朝はこのようにして始まったのである。――

――山のように積まれた洗濯物、鹽に洗濯板でゴシゴシ、ゴシゴシ。「鹽の底にこの風呂桶をかますと、丁度洗濯するにも楽な角度になり、水も半分ですむ」私の手元をじっと見ておられた師がおっしゃった。実はつい先程も釜を洗ってかまどにかけ、取って返して蓋を洗っていた私に「わしが洗うなら、先ず釜の上で蓋を洗い、釜に入れた水で釜を洗うがな」と申された。――

今回のことで、たびたび和敬学園へお伺いするうちに、月堂・弥生ご夫妻から聞いたご尊父琢堂さんのプロフィールのいくつかを、個条書きふうに書き加えておく。

① 晩年、僧衣のたもとに園の幼児が好きそうな菓子や小物が色いろ入っており、「いいもん持ってる」「園長先

生おくれよ」「やらへんで、やらへん」「そんないわんと……」「あ、とられたとられた」と、こんな会話をよくかわしながら、幼な児たちとたわむれておられた。

② あまから両刀使いであった。大衆食堂「大力」で、ぼた餅を食べたり、檀家さんで茶わん酒を一杯ぐつと乾された。そしてまた僧衣のままで、京極のストリップ劇場へ行かれたこともあった。

③ 少々、せわしく思うくらい几帳面であった。手紙なども書かれるとすぐポストへ入れに行かれた。碁・将棋もそれがカケゴトになると嫌われた。特に麻雀は、「尻が重たくなかなか立たん」と言って嫌いであった。

④ 応待がじょうずだった。お客さまが見え、私などが「まあどうぞ、おあがりください」と言っても「いや、これで結構です」と言っておられるところへ「やあやあこれは、ようこそお出でくださいました……」と先代が出てこれると、そのお客さま、いつの間にか部屋にあがって話し込んでおられました。

と、以上は「聞き書き」の一端である。取りあえず今回

の「琢堂小伝」を、「略年譜」を添えることによってとじたいと思う。

樋口琢堂略年譜

明治19年 12月8日三重県四日市に生まれる。

同 30年 12歳で上洛、銀閣寺に入り、般若林に学ぶ。

同 31年 10月4日皇太子（後の大正天皇）銀閣寺に行啓、案内役をつとめる。

大正4年 11月、大正天皇御大典。銀閣寺行啓の折の励ましのお言葉を想起し、衆善会を組織する。

同 6年 7月1日「衆善」（月刊）創刊。

同 10年 書院改築の費用を得るため「禅林佳話集」四千字部をつくり托鉢。

同 12年 関東大震災に際し、京都仏教護国団の一員として救援物資をおくる。

同 13年 京都仏教護国団の委託により、庫裡の一部を改造し、少年法による保護施設和敬学園を開設。

昭和3年 学園経営を仏教護国団より衆善会に委託される。

新園舎竣工。

同 9年 増築工事竣工式を行なう。同 14年 10月12日大臣表彰、銀杯拝受。

同 15年 3月1日奏任官待遇となる。11月25日司法保護事業功労章を受ける。

同 18年 11月「衆善」三一七号をもって終刊。

同 22年 2月10日宮中に召され兩陛下に少年保護・薫育の現状を言上。

同 24年 少年法改正により児童福祉法による養護施設として和敬学園再出発。

同 28年 「一日一善の妙味」を出版、その収益にて木造平家建45坪を増築。

同 29年 5月3日藍綬褒章受章。

同 32年 9月27日遷化。10月2日告別式に「追想」配布。